

釈尊の説法教化について (二)

宇 治 谷 顕

はじめ

私は前号において「釈尊の説法教化について(一)」と題して、釈尊成道後の四十五年間にわたる説法教化の歷程を考察しました。そこでは現代の宗教指導者が説法教化の際、ともすればおち入りやすい利他的側面のみの強調や、慢心のあまり自らの修行を怠るという状況を深く反省させられたのであった。釈尊の説法教化は衆生済度を目的とするのみでなく、自らさとした法、すなわち「縁起の実践」の場、修行の場としての確認がなされていたのである。釈尊の説法教化の四十五年間にわたる遊行の旅は、ただ単に衆生済度という利他的側面のみならず、自らさとした法の実践であり、人間生存の苦悩から解脱し、涅槃に至る自利的階梯でもあった。一般的には、釈尊はウルヴェーラ林において六年間の難行苦行の後、ブッダガヤの菩提樹下にて瞑想に入り、さとりを開かれたといわれ、このことを成正覚と称し、釈尊出家の目的が達成されたものと

解釈されている。しかし、釈尊のさとりの内容は「縁起の法」であり、その意味においては生死の苦悩から解脱する道を発見したことに他ならない。人間生存の中、苦悩の原因を明らかにし、その苦悩の原因である無明を断滅していく解脱道を発見したのであった。解脱道を実践し、究極的境地である涅槃寂静に至るための階梯を四十五年間の説法教化を通して自ら実践し成就したのであった。後世の仏伝作者により仏陀として称讃される釈尊は、八十歳においてクシナーラーにおける涅槃寂静の境地を修得することにより成仏されたのである。

I

今回は釈尊の四十五年間にわたる説法教化の実践面について、具体的にいかなる方法でもって説法教化に励まれたかを考察してみる。釈尊の説法教化の様相をみると、その対象はまさに様々であり、バラモン・外道の沙門・クシャトリア・バイシヤ・スードラなどに男女・善悪・貧富

の区別なく説法教化される。釈尊の説法教化が「対機説法」と称される由縁である。対象者の地位・職業に応じ、智慧・機根の優劣に応じ、また環境に適して臨機応変に、最勝の効果をもたらす方法で説かれている。

釈尊の「対機説法」は基本的に一対一の問答形式で説かれるものである。一対一の対話とコミュニケーションを原則とし、その上に同位的問題の探究が要請されるのである。この「対機説法」は、通常、二つのパターンに大別される。一方は「摂受」と呼ばれる方法であり、これは「次第説法」と「一乗道」とに分けられる。「次第説法」とは仏教を全く知らない人や、未だ他の教えに害されことなく温順な人に対して、譬喩や因果物語を混え、世俗的な簡単な教えから説き始め、その理解が深まるに従って次第に崇高な教えに進み、解脱に導こうとする方法である。次の「一乗道」とは単一の教法を用いて説法教化にあたることであり、譬えば四念処・六念（仏・法・僧・施・戒・生天への念）、三学などの中から一つを選択し、解脱の境地に導くよう教化することをいう。しかしながら、この二つの方法はその際限を確定することは非常に困難であり、時として混同して併用される場合も少なくない。

他方、すでに他の教えに信仰し、釈尊の教法を理論や言葉で説いても理解できないか、またそれらを全く受け入れようとせず頑強に拒絶する人々に対しては神通力などの特殊な能力を駆使し、神変を示現することにより相手を信伏させる方法がある。この方法を「折伏」と称する。

Ⅱ

ここでは、釈尊の四十五年間の説法教化の足跡を伝える仏伝をもとに「折伏」における神変示現について論究してみたい。

「折伏」について『摩訶僧祇律』は次のように記する。⁽²⁾

十事の利益あるが故に諸仏如来は諸弟子の為に戒を制し、波羅提木叉法を立説したまふなり。何等をか十とす。「一には僧を摂せんが故に、二には極く僧を摂せんが故に、三には僧をして安樂ならしめんが故に、四には無羞の人を折伏せんが故に、五には慚愧ある人に安隱住を得んが故に、六には不信者をして信を得せしめんが故に、七には已信者をして信を増益せしめんが故に、八には現法の中に於て漏盡を得んが故に、九には未生の諸漏を生ぜざらしめんが故に、十には正法久住するを得て諸の天・人の為に甘露の施門を開かんが故なり。是の十事を以て、如来応供正遍知は諸弟子の為に、戒を制し波羅提木叉法を立説したまふなり」と。

「折伏」とは『摩訶僧祇律』によれば無羞の人を教化するために用いられる方法であるという。羞恥心のない人、自分自身に対して間違いを間違いと感ぜず慢心している人に対しては「折伏」をもって教化するのである。

また『勝鬘經』十大受章には次のように伝えている。⁽³⁾

世尊、我れ今日より乃し菩提に至るまで、若し捕と養との衆の惡律

儀と及び諸の犯戒とを見ては、終に棄捨せずして、我れ力を得ん時、彼彼の処に於いて、此の衆生を見ては、応に折伏すべき者は之を折伏し、応に摂受すべき者は之を摂受せん。⁽⁴⁾何を以ての故に。折伏と摂受とを以ての故に、法をして久しく住せしむるなり。法、久しく住すれば、天人充滿し、惡道減少して、能く如来所轉の法輪に於いて、隨轉することを得ん。是の利を見るが故に、救摂して捨めず。動物を捕獲し、飼養することを商とし、如来の教を守らず戒を犯すものを見れば、彼らを見捨てず、何処においても、だれかれとなく戒めるべきは「折伏」し、救いとるべきはこれを「摂受」する。この「折伏」と「摂受」により真実の法を永く顯現し、神々や人間に生まれる者が増し、惡趣に墮するものが減少すると語る。「折伏」と「摂受」が衆生済度のために同位的に記述されている。これらの伝承から、仏教における説法教化の方法は「折伏」と「摂受」を併用するのが一般的であったと考えられる。

Ⅲ

この「折伏」の行為を仏伝伝承から考察すると、その多くは神通という特殊な能力を駆使し教化にあたるのが通常であろう。神通とは通常の人間の能力を超越した変幻自在の活動能力であり、摩訶不思議で無礙自在な威力をあらわす。この力を神通力と称する。⁽⁵⁾

神通力は、その能力が超人間的であるがゆえに八神⁽⁶⁾と呼ばれ、また

無礙自在であるがゆえに八通⁽⁷⁾と呼ばれる。經典に依れば、この神通力は聖者の具備するものとして、しばしば三明・六神通の名称で次のごとく記されている。

- 一 神境通 自由に欲する所に現れる能力
- 二 天眼通 自分や他人の未來世におけるあり方を知る能力
- 三 天耳通 普通人では聞き得ない音声聞きとる能力
- 四 他人通 他人の考えていることを知る能力
- 五 宿命通 自分や他人の過去世のあり方を知る能力
- 六 漏尽通 現在の生が苦であることを知り、その苦の原因である煩惱を取り除く能力

このうち、宿命通・天眼通・漏尽通の三種を、特に三明と称し、宿命明・天眼明・漏尽明と言う。⁽⁸⁾宿命明は宿世の因縁を知ることにより、自他の過を糺し、これによって常に正しい思いをもつ。天眼明は未來の果報を知ることにより、自他の未來を知り、これによって開かれた豊かな思いをもつ。漏尽明は煩惱が尽きて得た智であり、現在の煩惱を斷じ、これによって恚意を斷じ、悪い思いをたつ。これらの三明は過去・現在・未來に通ずる絶対な力としてあらわされている。

六神通のうち一〜五までは心身における超能力をあらわし、六の漏尽通のみは智慧による超能力をあらわしている。この漏尽通は最も仏教の性格を象徴したものであり、仏智の修得を重んずる仏教らしさを如実にあらわしている。当然のことであるが、当時の沙門と呼ばれる外道、お

よびバラモンの修行僧も難行苦行の結果、これらの超能力を修得したであろうし、またこれらの超能力を修得することを目的として修行に励んだであろう。しかし、この漏尽通は仏教独自の超能力であり、他派の修行僧には修得できない能力であった。仏教において、この智慧は無分別智であり、宗教的叡智である。「さとり智慧—仏の智慧」であり、仏道修行の目的である阿羅漢果に到達する人々は必ずこの漏尽通を修得するのである。釈尊の仏弟子の中、目犍連は「神通第一」と称讃され、様々な神通力を修得したのであるが、それらはすべて漏尽通に裏付けられていたのである。

釈尊は、その修行の階梯において様々な神通力を修得されたと伝えられている。如來の十力⁽⁸⁾や十八不共法⁽⁹⁾があり、四無礙解⁽¹⁰⁾を修得され、それによって説法教化が無礙自在であったとされる。また仏弟子達も修行し、阿羅漢果に到達すれば三明六神通などの超能力が修得されるといふ。これらの特殊能力により、説法教化がより効果的におこなわれたのであった。

IV

釈尊生涯の様相を伝える伝承によれば、神通、および神通力を伝える箇所は少なくない。前述したごとく、如來・阿羅漢果に到達するには、三明六神通の超能力を修得せねばならなかった。故に一般民衆では、釈尊は神通力のすべてを修得した人であり、偉大な神変奇蹟をあらわし得

る人であると信じられていた。一方、釈尊に反感を抱く人々からは次のような非難も向けられたという。

「実に修行者ゴータマは幻術者である。他の異学の人々の弟子をひきよせるために幻術を誘いのてだてとすることを知っている」⁽¹¹⁾

しかし、神通力の使用を無制限にゆるされていたのではなく、釈尊においては教化に必要と認められた時に限ってその使用をゆるされたのである。この立場は「教誡神変」といわれ、その使用には厳格、かつ慎重な姿勢が要請されるのである。他方、「摂受」といわれる四諦の理法を説いて自由に相手を制し、従わせる立場を「教誡示導」と呼ぶ⁽¹²⁾。

また、釈尊晩年の出来事であるコーサラ国のヴィドゥーダバ王がカピラ城を攻撃するについて興味ある伝承がなされている。仏伝にはおよそ次のように伝えられている⁽¹³⁾。

ヴィドゥーダバ王は四軍（象兵・戦車兵・騎兵・歩兵）を率いてシヤカ族の首都カピラ城を攻めようとした。最初の攻撃の時、シヤカ国に通ずる街道の枯れ木の下で、静かに瞑想しておられた釈尊に出会った。ヴィドゥーダバは釈尊を見て、「枝葉のよく繁った大樹がほかに数多くあるのに、何故に枯れ木の下で坐すのか」と尋ねたところ、釈尊は「親族のかげは外の人に勝る」と答えた。これを聞いたヴィドゥーダバはカピラ城を攻めるのを止め、兵を引いて退いた。しかし、ヴィドゥーダバは若い頃シヤカ国に赴いた時に受けた侮辱に対する怨みを捨て去り難く、遂に三度目の出兵におよんだ。

釈尊の弟子、目犍連は「(神通力を駆使し)鉄籠をもってカピラ城の上を覆いましょう」と進言したけれど、釈尊はこれを断わり、「今日宿縁すでに熟す。今まさに報を受くべし」と言つて黙殺された。その結果、ヴィドゥーダバはカピラ城を攻めおとし、シャカ国の人々は一人残らず惨殺された。

この事件は、仏伝において釈尊の晩年、在世中に起つたとして記されているが、恐らく釈尊滅後の出来事であつたものと推測される。後世の仏伝作者によつて多少の加筆がなされ、釈尊在世中の出来事として挿入されたものと思われる。

史実とは認めがたい伝承であるけれど、釈尊が目犍連に対して神通力を使用することを禁止されたことに着目される。⁽¹⁴⁾史実に反してまでもあえて釈尊生涯の伝承の中に挿入されたことは何を意味するのか。それは、説法教化に際し神通力が一般大衆の間でいかにセンセーショナルなことであつたかを窺がえるのである。釈尊滅後に勃発した事件が、もし釈尊在世中であつたならば、このようにされたであろうという推測のもとに、このような伝説が成立したのである。⁽¹⁵⁾説法教化に際し、神通力の使用に対する釈尊の考えと、一般大衆の思考風潮が顕著にあらわれた伝承として興味深い。

パーリ阿含の中には、釈尊が修行中に神通力を修得する目的を次のように語っている。⁽¹⁶⁾

『サーヴァッティーにて。

釈尊の説法教化について (二)

修行僧らよ、わたしがさとりを開くよりも以前に、まださとりを開いていないで、菩薩であつた時にこのように思った。——「神足を修練する原因・由縁は何であるか?」と、その時、わたしはこう思った。

ここで欲の三昧・勤行の形成をそなえた神足を修練する。このようにすれば、わが欲はあまりに萎縮することはないであろう。また、あまりに制圧されることはないであろう。内的に収縮することもないであろう。外的に散乱することもないであろう。前後に想をさせていて、後は前のごとく、前は後のごとく、上は下のごとく、下は上のごとく、夜は昼のごとく、昼は夜のごとくである。このように広大にして纏縛されない心をもつて光輝ある心を修練する。』

以下、同様の文句を繰り返す。

勤めの三昧・勤行の形成をそなえた神足を……………。

心の三昧・勤行の形成をそなえた神足を……………。

考察の三昧・勤行の形成をそなえた神足を……………。

釈尊は「欲の三昧——すぐれた瞑想を得ようと願うこと」、「勤めの三昧——すぐれた瞑想を得ようと努力すること」、「心の三昧——心をおさめて、すぐれた瞑想を得ようと努力すること」、「考察の三昧——智慧をもつて思惟・観察して、すぐれた瞑想を得ようと努力すること」の四神足を修習した聖者であつた。この四神足を修習すれば「広大にして纏縛されない心をもつて光輝ある心を修練する」と語る。すなわち、何物に

もとらわれない心、執着のない心を修習することができるという。六神通のうち漏心通の修習がなされたと解すべきであろう。

さらに釈尊は、この四神足を修習することにより次のような神通力を修得することができるという。

- (1) 多様な神変を身に受け、自在にあらゆる処に出現できる。(神通境通)
- (2) 清浄にして超人的な天の耳の本性をもって遠近にある天的な、また人間的な声を伴に聞くことができる。(天耳通)
- (3) 他の生存者、他の人々の心を、心によって了解して知ることができる。(他人通)
- (4) 種々なる過去の生涯を思い起こし、そのあり様を知ることができる。(宿命通)
- (5) 清浄で超人的な天眼をもって、諸々の生存者が死に、また生まれるのを見ることができ、すべて業に従っているのを知ることができる。(天眼通)

そうして最後に次の文で結んでいる。

「このように四神足が修練され豊かにされた時に、諸々の煩惱の汚れがほろぼされることによって、汚れない心の解脱・智慧の解脱をこの世において、自ら証知し、現証し、具現して住する。」

釈尊は四神足を修習し、諸々の煩惱の根源を断ち、清浄なる心を完成し、解脱の境地を修得したと、自ら述懐されているのである。

『ミリンダパンハ』には、次のような問いがミリンダ王からナーガセーナ長老にむけられている⁽¹⁷⁾。

『スッタニパータ』に記されるセーラバラモンに対する釈尊の陰所示現の説話にふれて、これは釈尊の身・口・意の三業の自制に関する教えと矛盾するという質問に、長老は釈尊が自己の陰所を示したのは、次の理由によると答えている。

「大王よ、何びとでも、如来について疑いの生じた者には、釈尊はかれを覚らしめるために、神通によってそれと相似した身体の像を見せしめ、かれだけがその神変を見るのです。」

如来を疑う者のみ、神変示現となってあらわれるのであるという。

また、他の章では神変示現の問答が次のようになされている⁽¹⁸⁾。

陶工ガティーカーラの家にも雨期三ヶ月間屋根が無かったが雨は降らなかったが、それなのにカッサバ如来の茅舎には雨が降った。この矛盾を王に指摘された長老は、次のように答えている。

「大王よ、如来は(降雨という)それだけの变化に動揺しません。

……大王よ、また如来の茅舎に雨が降ったのは、かれが大衆の人々を慈しみ給うたからに外なりません。大王よ、如来はこれらの二つの理由を見て、自ら化作した必需用具を使いません。すなわち、『師はこれ、最高の布施を受くべき人である』という理由によって、諸神や人々が、世尊に必需用具を施すならば、かれらはあらゆる惡の生存から、完全に脱れるでしょう。『神変を示現して(それによって)、生計

を希求している』と云つて、他の者たちが（われわれを）咎めることのないようにと。これら二つの理由を見て、如来たちは自ら化作した必需用具を使わないのです。」

ここに記すことは、如来の神変が大衆に対する慈愛・憐憫の心から生ずるのであり、必要以上に神変を显现しないという仏教の神変観を象徴したものである。神通力を駆使し、神変を显现することを認めるのは、超人間的摩訶不思議な力を称讃するのではなく、仏教修行者の修習のバロメーターとしての役割りをも持っていたと考えるべきである。釈尊の説法教化において、神通力の使用、および神変の显现は「心の自在力」の発露であり、それによって人々の心を開放し、和らげ、従順にする働きを察するものである。

V

釈尊生涯をつづる仏伝中に神変奇蹟を伝える箇所は少なくない。釈尊の誕生・成道・涅槃などについては、多くの神変奇蹟が伝えられ、あたかも釈尊自身が生前より聖者であったかごとく語り超人間性を強調している。しかし、四十五年間の説法教化において「折伏」の方法をとる場合は少なく、またその伝承も神変奇蹟については、それ程、具体的に伝えていない。仏伝中、釈尊が説法教化に神通力を駆使したと伝えるのは六件にすぎない。すなわち、ヤサの父親・カッサバ三兄弟・ダナンジャニーとその夫・スッドウーダナ王・凶賊アングリマーラ・ケーマー王妃

の教化に際してである。⁽¹⁹⁾ 前号で考察したごとく、仏伝における釈尊の説法教化の足跡はのべにして一〇〇件近くにおよぶ。その中、僅に六件であり、このことから釈尊の説法教化の姿勢は神通力を駆使した「折伏」の方法が常套手段ではなく、あくまでも非常手段であったと考えるのが妥当であろう。

仏伝の性格上、その成立年代は早くとも釈尊滅後二〇〇／＼三〇〇年以降、釈尊の神格化が進む時代であったと思われる。釈尊生涯における神変奇蹟の伝承は、恐らくその大部分が後世の伝説作者によって意図的に加筆されたものであろう。しかし、私はこれらの神変奇蹟を歴史的史実として認められないからと言ってこれらを無視するものではなく、加筆された神変奇蹟の伝承にこそ一層の興味を抱くものである。宗教的経験の上にたつ時、民衆を引きつけ、深い信仰心をあたえるには神通力を駆使して教化にあたることにより、より一層の効果を生み出すのである。

また、このような超人間的な能力による超経験的世界の显现は宗教にとって欠かすべからざる要素であると考えざる由縁である。

しかし、前述したごとく神変显现の伝承が釈尊の生涯を通した時、説法教化の四十五年間は以外と少なく、教化の多くは「次第説法」で導かれている。仏教の究極の目的である涅槃寂靜に到達するには「仏の智慧」の修習が肝要であり、これら多くは「次第説法」で説かれる「施・戒・生天」から「四諦」の説法によって導かれるのである。この意味では説法教化にあたっての神変显现は教化の第一関門であり、釈尊の教え

に頭から反駁し、耳を傾けようとしないう人に対し神通力が駆使され、釈尊の説法に対する偏見を取り除いた後、「次第説法」によって正しく導かれるのである。

釈尊は神変示現を駆使し教化した六人に対し、偏見を取り除いた後、「次第説法」によって教化をしている。釈尊の説法教化の姿勢は「対機説法」であり、相手の性格を見抜き、生い立ち、思いを計り知る能力、すなわち洞察する能力、これらはすなわち六神通の能力であり、相手の機根に応じておこなう釈尊の説法教化の姿勢からは必ずこれらの能力が不可欠なものである。だからこそ、阿羅漢果に到達するには三明六神通の修得が課せられたのである。

前号でも明らかにしたごとく、釈尊における説法教化の姿勢は衆生済度という慈悲行としての大乗利他行と、他方、自らの修行の階梯としての「縁起の法」を実践し、さとりを覚証する自利行とが調和したものである。自らの解脱道として「縁起の法」実践のために衆生世間を選択され、衆生済度の説法教化における慈悲行のまっとうが涅槃寂靜の境地を修得することと考えられていたであろう。

VI

そこで、釈尊が神通力を用いて教化にあたったと伝えられる伝承をもとに、いかなる説法教化の展開をなしたかを紹介し、現代における仏教指導者の伝道の一助としたい。

(一) 富商ヤサ親子

ベナレスの富商ヤサの子は釈尊の説法を聞き、出家しようとした。それを見たヤサの父親は息子に思いとどまらせようと彼を追跡した。釈尊は父親が遠くからやって来るのを見て、次のように思われた。「よし、わたしは神通の変化を現わし出して、富商資産者がここに坐っても、ここに坐っている良子の子ヤサが見えないようにしてやろう。」こうして釈尊は、ヤサの父親にそのような神通の示現をした。

釈尊が父親を説法教化している間に、子ヤサは執着がなくなり、心が煩惱から解脱したので、そこで釈尊は神変の示現を取り止められた。その後、ヤサの家族、友人達は釈尊の説法を聞き出家した。⁽²⁰⁾

(二) カッサパ三兄弟

釈尊はベナレスにおいて富商ヤサ親子などを教化した後、修行の地・ガヤに戻った。そこで、この地に住む三人の結髪のパラモンであるカッサパ三兄弟とその弟子達を教化した。

釈尊は長兄のウルヴェーラ・カッサパのところへ赴き、聖火堂での一夜の宿を願った。彼は聖火堂には凶悪で神通力を持つ竜王、恐ろしい猛毒ある蛇が住するからといって断わるが、ついには許した。はたして、釈尊が聖火堂に入るや、毒蛇は煙を吐いてきたので、釈尊は欣然として神通をあらわし煙を吐いた。次に毒蛇は火災を発したが、釈尊も光炎を発し対抗した。ついに毒蛇の火災は消滅し、釈尊の光炎のみが燃え続け、多くの色を現わした。すなわち、青・赤・深紅・黄・水晶色であ

り、釈尊の身体には多くの色の光炎があった。毒蛇は鉢の中に納められ屈從したのであった。

さらに釈尊のもとには四天王・帝釈天・梵天などが訪れ教化されたという。しかし、ウルヴェーラ・カッサバは「かれはわたしのように真人ではない」と語り、信伏しなかった。そこで釈尊が様々な神変奇蹟をあらわすのである。仏伝には次のような神変奇蹟が記されている。

- (1) ウルヴェーラ・カッサバの心の思いを心によって読みとる。
- (2) 帝釈天の心の思いを心によって読みとる。
- (3) ウルヴェーラ・カッサバより後に出発し、さらにジャンブ・ディ
ーバという名称のもとになったジャンブ樹の実を取って来たのに、
彼より先に聖火堂に帰って来ていた。

(4) 聖火に仕えるための薪を割ろうとしても中々割れなかったが、釈尊はたちまちに五〇〇の薪を割ることができた。

(5) どうしても薪に聖火を灯すことができなかったのに、釈尊はたちまちに薪に火を灯し、五〇〇の聖火が燃えあがった。

(6) また、今度はどうしても消すことができなかったが、釈尊はたちまちに聖火を消した。

(7) 大きな暖炉を造り出した。

(8) 大洪水の時、空中に跳び上って水中にさらされず船中に立った。

このような様々を神変奇蹟を示現しても信伏しないカッサバに釈尊は次のようにさとすのである。

「カッサバよ。あなたは真人ではない。また、真人たるの道を実践しているのではない。あなたが真人となったり、あるいは真人たるの道を実践する者となるはずの道を、あなたはまだ得ていないのだ。」

この言葉を聞いたカッサバは、釈尊の達観に感服し、釈尊のもとで出家し、受戒を申し出て許された。さらに、ナディー・ガヤの両兄弟も、その弟子達とともに釈尊のもで出家し、受戒を得た。ここで千人におよぶ人々を教化し、出家せしめたと伝えられている。釈尊は、これら一〇〇〇人の弟子を率いてラージャガハの郊外にある象頭山頂に登り、町の火を見おろしながら「燃火の教」を説かれたのであった。⁽²¹⁾

(三) ダナンジャニーとその夫

ダナンジャニーは釈尊に対して絶対の帰依者であったが、その夫は、妻があまりに熱心なため心良くは思っていなかった。

そこで彼は釈尊を論破しようと問答を試みた。釈尊は怒にみちた彼の「何を殺せば幸福に寝られ、何を殺せば悲しむことがないのか。釈尊よ、君はいかなるものを殺害することを賞讃するか。」という質問に対し、「怒りを殺せば幸福に寝られ、怒りを殺せば悲しむことがない。バラモンよ、毒の根である怒りを殺すことを聖者は賞讃するのである。」と答えている。バラモンは自分の心中を見抜かれ、まさに当意即妙の適切な説法がなされたことに感服し、反抗の心は消え、釈尊のもて出家したと伝えられる。⁽²²⁾

このことは六神通のうち他心通の駆使であり、相手のことを良く理解

することから始まる「対機説法」の第一関門と思われる。

(四) スッドウーダナ王

釈尊はラージャガハでの教化の後、故郷のカピラ城に帰り、シャカ族の人々五〇〇人を教化せしめたという。ここで釈尊は父王、スッドウーダナをはじめヤシヨードラー妃やラーフラ王子をも教化したと伝えられている。しかし、この再会は古い經典には登場せず、またこの再会を伝える後世の諸仏伝もその内容は一様ではなく、さらに一層の研究が必要とされる次第である。⁽²³⁾ この伝承に関する考察は別の機会とし、今はこの再会を伝える諸仏伝の中から『ブッダチャリッタ』に記される神変奇蹟の様相を紹介することとする。

カピラ城内に入った釈尊を出迎えに出たスッドウーダナ王はその姿を見て、すこやかな容姿もなく、粗末な衣裳を着ているのに悲しみ、また近くに坐しても彼にむかって呼びかけることもできなく、ただ悲嘆にくれるのであった。この父王の姿を見た釈尊は、父王の息子だということだわりを拭い去るために次のような神変を示現したという。

(1) 息子だという思いにこだわっている父王の心を知り、またその他の世間の人々にも憐みの心もち、そのために釈尊は空に飛び上って「神通を現わし」た。

(2) 太陽の馬車を手にて触れ、風の通る道を両足にて行き、体一つにしては多くの分身を作り、多くの分身となつては一つに還られた。

(3) 地に潜ること水におけるごとく妨げなく、水面を踏み歩くこと地上におけるごとく、壁や山を突き抜けるのは空中におけるごとく妨げられずに没入した。

(4) その半身は水の雨を降らし、他の半身は火のごとく燃えた。山は燃え上がる草とともに焼けるがごとく、空中にあるものは何にせよ燃え、燃えて輝いた。

(5) 威力を好むこの人（父王）の心にこうして歓喜を生ぜしめたのち、第二の太陽のごとくに空に坐して、国守「たる父王」に向つて教えを説かれた。

釈尊は神変奇蹟を示現することにより、父王のこだわを取り除き、しかる後、次第説法で教化し、またヤシヨードラー妃とラーフラ王子も説法教化をうけ出家したと伝えられる。⁽²⁴⁾

(四) 凶賊アングリマーラ

利発聡明な青年アングリマーラは師の妻の邪心のため、師より反感を受けた。その為、師は彼に人々の指を百本切り取り首飾りを作れば、彼の修行は完成されるとそそのかした。彼は、人々の指を切り取り首飾りを作り始めたためアングリマーラ（指の首飾をもった者——指鬘）と呼ばれた。

釈尊は、弟子達の制止するのも聞かないでアングリマーラの方に歩を進められた。彼は釈尊が先方から来るのを見て、やり過越してから襲おうとばかり待ち構えていた。釈尊は神通力を示現し、彼が全速力で走っ

でも、ゆっくり歩く釈尊に近づくことはできなかった。彼は、「止まれ」と呼ぶと、釈尊は、「自分は止まっている。アングリマーよ、あなたこそ止まりなさい。」といわれる。彼は不思議に思い、「何故あなたは、自分で歩いているのに止まっているといい、私が止まっているのに止まっていないのか。」と反論すると、釈尊は、「自分は一切の生類に対して害心を捨てているから止まっているのであり、君は生類に対して自制心がないから、止まっていないのです。」と答えられた。これによって彼は心の眼を開き、前非を悔いて釈尊に師事し、出家を許されたと伝えられる。

その後、彼はサーヴッティー町を托鉢している時、人々は彼が凶賊であったことを知り、彼に石や棒を投げつけ、彼は傷ついたが、釈尊は彼にすべてを忍受すべきことを説き、やがて彼は阿羅漢果に到達したと伝える。⁽²⁵⁾

(六) ケーマー王妃

ケーマーはマガダ国ビンビサーラ王の妃であり、その美貌のため高慢であり、釈尊に敬礼をあらわさなかった。これを知った釈尊は、神通力をもって彼女以上の妙齡の美人を化作し、その女が次第に年をとっていき、美貌が失われ醜くくなり、ついに衰え崩れていく様を彼女にあらわされた。さすがの彼女も世の無常を感じ、釈尊に敬礼し、ついに出家して比丘尼となったと伝える。⁽²⁶⁾

ケーマーは比丘尼僧伽の中で神通第一と称されたウッパラグナーと

仲が良く、常に二人は共にいることが多かった。美貌の彼女らは、ある時、兎漢に襲われたが、自分の眼をえぐり出し、兎漢をいさめたという話も伝えられている。

むすび

周知のごとく、宗教家は単なる理論家や学者であってはならない。ここでは自らの修得した知識・学徳を切り売りするがとき説法教化は、もっとも慎しむべき姿勢である。宗教とは、人間の問題、譬えば「いかに生きるべきか」「何のために生きるべきか」という人生全体、全自己にかかわる課題を「究極的」に解決しようとするところに特徴的性格が存すると考える。「究極的」ということを人間生活の上に考えてみる時、それは二つの意味が含まれている。一方は、限りなく広く、深い人生の思慮の上に立つことであり、およそ人間が考えうる最大の、そして最も深い思慮に裏付けられなければならない。他方は、人間を超越した、もっと高い立場からの思慮を想定しなければならないと考える。根本的には、この二つの異質的立場が存し、換言すれば、前者は感覚によってとらえることのできる経験的世界であり、後者は常識を越え、神秘に満ちた超経験的世界である。これらの要素は宗教が成立する上には必要不可欠なものと考えられるのである。

この意味から考えると、釈尊における神変示現の説法教化は超経験的世界の化作であり、大衆を教化して行くためには必要不可欠なものである。

ったのであろう。説法教化における神変示現の伝承は、後世の伝説作者による釈尊の偉大さを誇示せんがための多少の誇張はあるものの、それ故に、当時の一般社会にあつて神変示現の風潮が、大衆の間で広くもてはやされていたことを窺うのである。

ここで、仏教指導者が忘れてならないのは、釈尊が説法教化に際し神通力を駆使されたのは、あくまで漏尽通が主体であり、他の五神通は、いつ何時でも、何処にあつても、どんな状況においても漏尽通に先行するものではないことである。漏尽通こそが、仏教本来のもっとも特徴的な神通力である。釈尊は苦行の無意味をさとした後、菩提樹下にて瞑想に入り、さとりを得られたのである。仏伝はその瞑想を三段階に分け、初夜には宿命通、中夜には天眼通、後夜には漏尽通を修得され、さとりを完成されたと伝える。⁽²⁷⁾漏尽通こそは、まさに「仏の智慧」であり、仏教本来の説法教化方法である「次第説法」への第一関門であつたのである。

釈尊の説法教化は「対機説法」といわれ、その方法は「折伏」と「次第説法」とに大別される。今回は、神通力を駆使し、神変を示現することによる教化法を取り上げ、その内容を考察した。次の機会には「次第説法」の内容を詳察し、一層の核心に迫るとともに、現代において、説法教化に志ざす人々にその一助となるべく願う次第であります。

おわり

註

- (1) 『同朋学園仏教文化研究所紀要』第六号
- (2) 『摩訶僧祇律』一卷(大正蔵二二卷二二八下)
- (3) 『勝鬘經』十大受章(大正蔵一二卷二一七中下)
- (4) 聖徳太子の注釈には次のごとく記される。
「我れ力を得ん時とは、力に三種あり。一に勢力、二に道力なり。彼々の処とは、若し善を行ぜざれば、即ち諸道皆閉じて生死に流転し、大趣に透移す。故に大士、彼々の処に於て、皆此の人を見て、重悪は即ち勢力を以て折伏し、軽悪は即ち道力を以て摂受す。」
- (5) 神通・および神通力については次のような参考資料が伝えられている。
『増壹阿含經』一〇卷(大正蔵二卷五九三下)
『箭喻經』(大正蔵一卷九一八中)
『維摩經』(大正蔵一四卷五三九上、五四四中、五五二上)
『大智度論』二八卷(大正蔵二五卷二六四中下)
『無量壽經』(大正蔵一二卷二六五下)など。
- (6) 『有部律・破僧事』六卷(大正蔵二四卷一三一中)
『維摩經』(大正蔵一四卷五三九下、五五五上)
- (7) 『觀無量壽經』(大正蔵一二卷三四五中)
『俱舍論』二七卷一二一三、三十卷三三)
- (8) 『瑠伽論』一四卷(大正蔵三〇卷三五〇上)
仏に特有の十種の智力であり全智者であることを示す十の力。すなわち
(1) 処非処智力―道理にかなうことと道理にかなわぬことを弁別する力。
(2) 業異熟智力―一つ一つの業因とその果報(異熟)との関係を如実に知る力。(3) 靜慮解脱等持等至智力―四禪・八解脱・三三昧・八等至などの禪定を知る力。(4) 根上下智力―衆生の機根の上下の優劣を知る力。(5) 種種勝解

智力―衆生の種々の望み（意樂）を知る力。(6)種種界智力―衆生や諸法の本性を知る力。(7)遍趣行智力―衆生が種々のところへおもむくことを知る力。(8)宿住隨念智力―自他の過去世を思い起こす力。(9)死生智力―衆生がここに死んでかの所に生まれることを知る力。(10)漏盡智力―煩惱を断じた境地と、それに到達するための手段を如実に知る力。（仏教語大辞典・中村元著、六六一頁―六六二頁参照）

- (9) 仏陀だけに特有な十八種のすぐれた特質。十力と四無畏と三念住と大悲とをいう。大乘仏教では次の十八をいう。(1)身・口・意の三業について過失のないこと。(4)衆生に対する平等心。(5)禪定による心の安定。(6)すべてを抱擁して捨てない心。(7)衆生済度の欲と精進・念力・禪定・智慧の五点について減退することのないこと。(8)解脱からあともどりしないこと。(9)衆生済度のため、智慧の力で身・口・意の三業を現すること。(10)過去・未来・現在の一切のことを知悉してとどこおりないこと。（仏教語大辞典・中村著、六五九頁―六六〇頁参照）

- (10) 四無礙智・四無礙辯ともいう。四種の（自由自在で）障りのない理解表現能力の意。仏・菩薩の説法における智弁を意のはたらきであるという点で解、あるいは智という。(1)法無礙―教えについて滞ることのないこと。(2)義無礙―教えの表わす意義内容を知って滞ることのないこと。(3)辞無礙または詞無礙―諸方の言語に通達していて自在であること。(4)衆説無礙または非無礙智―以上の三種の智をもって衆生のために自在に説くこと。（仏教語大辞典・中村著、五三三頁―五三三頁参照）

- (11) Majjhima-Nikāya, vol. I, p. 375.
 (12) 『集異門論』（大正蔵二六卷三八九下）
 (13) 『増壹阿含經』二六卷（大正蔵二卷六九〇上―六九三）・Bhaddasāla-jātaka (No. 465) Jātaka, vol. IV, pp. 144~153.
 (14) Jātaka, No. 483. には、長老マンドーラ・パールドヴァージャが神通

力によって王舎城の商人のところから栴檀の鉢を買って来たとき、釈尊は修行僧らに神通奇蹟の使用を禁じた、という伝承が残っている。

- (15) 中村元博士著『ゴータマ・ブッダ 釈尊の生涯』原始仏教Ⅰ・四一三頁参照。

- (16) Samyutta-Nikāya. I, II, Pubbe (vol. V, pp. 263~266). 訳参中村博士前掲書一七八―一七九頁。

- (17) 中村博士・早島鏡正博士共訳『ミリンダ王の問い』2・東洋文庫15 一三一頁参照。

- (18) 中村・早島博士前掲書二五〇―二五二頁参照。

- (19) この他、仏伝には仏弟子達が説法教化に際し、神通力と駆使したと伝えるものが数件ある。譬えば次のような伝承がある。「コーサンビー出身の僧ビンドーラ・パールドヴァージャは禪定にはげみ神通を得意としていた。ある時、王は大勢の官女を連れて林園で遊んでいたが、王は疲れて眠ってしまった。ビンドーラは丁度林園で坐禅をしていた。官女たちはビンドーラの所に行って説法を聞いており、王は目をさまして官女らを見つけた時彼が誘惑したと思い、彼に赤蟻をふりかけたが、彼は神通をもつてのがれ後に王のために説法し、帰依せしめた」という。（南伝三五卷二頁以下）

- (20) Vinaya, Mahāvagga I, 7, 1-6. 中村博士前掲書二六七―二七八頁参照。Suttanipāta, pp. 15; 86; 123 etc

- (21) Vinaya, Mahāvagga I, 15, 1-6. I, 16, 1. I, 17, 1-2. I, 18, 1-2. I, 19, 1-4. I, 20, 1-24.

- (22) 相應部七の一（南伝一二卷・二七四頁以下）

- (23) 水野弘元博士著『釈尊の生涯』二〇二―二〇三頁に考察されている。釈尊の帰国を成道後二年（パーリ説・仏所行讃）・父王は第一年に鹿野苑に使者をつかわす（仏本行集経）・成道後六年にウターイーをつかわし、釈尊の帰国が成る（普曜経・仏本行経・大衆部の説）・祇園精舎の完成後、ウ

ダーイをつかわし帰国が成る（衆許摩訶帝経）・成道後十二年の帰国（十

二遊行・仏本行集経の一説）

(24) 増支部四の一九五（南仏一八卷三四頁以下）

(25) 中部八六アングリマーラ経（南伝一一卷上、一三一頁以下）

(26) 相應部四四の一（南仏一六卷上、九九頁以下）

(27) Suttanipāṭa 425~449.（南仏二四卷、一五四頁以下）